

婚約破棄された
王子を拾いまして
～解呪師と呪いの王子～



大江戸ウメコ

Umeko
Ooedo

目次

婚約破棄された王子を拾いまして
〜わいせつ呪師まじと呪いの王子〜

5

クレバの森への帰省

323

書き下ろし番外編

王妃と呪いのペンダント

355

婚約破棄された王子を拾いまして
解呪師かいじゆしと呪いの王子まじな

呪われた男を拾いました

庭に男が落ちていた。

薬草を探りに行こうとトレッサが重い腰をあげ、建付の悪い古びた木戸を押し開いた瞬間、ゴンと扉がなにかにぶつかった。

また動物が迷い込んできたのかとトレッサは眉をひそめたが、庭先に転がっていたのは森に棲む獣——サイガでもアイベックスでもなく、大きな人間の男であった。

「っ!？」

トレッサは思わず目を見開いた。

こんな辺境の森で人と出会うなんて初めてのことだ。

森の中に引きこもって十九年。トレッサが交流する相手など、それこそ麓ふもとの村の住人くらいである。小さな村の住人は全員が顔見知りだが、この男は明らかに村の人間ではない。

まだ若い男だった。年の頃はトレッサと同じくらいだろうか。

少シクセのある柔らかそうな黒髪が、陽光を受けて輝いている。うつ伏せで倒れているので顔は見えないが、このあたりの村人では決して手に入れられないだろう上質な服を着ていた。

——どうしよう、面倒くさい。

行き倒れの男など、わけありの匂いしかない。

できれば見なかったことにして、家の中に戻りたい。

そんな気持ち芽生えたが、さすがにこんなものを家の庭先に放置したまま中に戻るのも気がひける。

生きているのかと疑問に思ったトレッサが恐る恐る男の身体に触れてみると、温かい体温が返ってきた。

死体ではないとわかって、ほっと息をはく。

森に引きこもっていたトレッサに、行き倒れを介抱した経験などない。とにかく外傷がないか探ってみようと腕に力を込めると、男の身体がゴロンと転がった。

「わあ！」

仰向けになった男の顔を見て、トレッサは声をあげた。

倒れていた男の顔は右半分が焼け爛れて、原形をとどめないほどに皮膚が崩れていたのだ。

その傷を隠すためか、長く伸びた男の前髪は顔半分を覆っていたが、転がった衝撃で傷口が露わになっっている。

あまりにも醜く痛々しい顔の傷。

けれどもトレッサが声をあげたのは、彼の傷が原因ではなかった。

——こんな見事な呪いは初めて見た。

男の傷から立ち上る呪いの気配を感じて、トレッサは銀色の目を爛々と輝かせた。

トレッサの左目は少々特殊で、視力は低いが呪いが見えるのだ。

その男の傷にまとりつく呪いは、ドロドロと黒く濁っていて、かなりの執念深さで何度も丁寧に重ねがけされたのだとわかる。

男の傷にかけられた呪いを見た瞬間、トレッサから男への警戒心がふきとんだ。

ああ、知りたい研究したい呪い解呪したい。

むくむくと、トレッサの中に研究欲が湧いてくる。

その瞬間、トレッサはこの男を拾うことに決めた。

トレッサは呪われた男をどうにか家の中に運び込むと、せつせと介抱した。

大きな外傷は見当たらなかったため、行き倒れの原因はおそらく衰弱だろう。

顔の傷はかなり酷いが、古い傷のようでもう乾燥している。この傷が原因で行き倒れていたということはなさそうだ。であれば、水分と栄養を与えれば目を覚ますはず。

トレッサは作業場でいくつもの薬草をすり潰し、栄養価の高い薬湯を作った。

意識のない人間に薬湯を飲ませることはできないが、薬湯で湿らせた布を口に含ませ、少しずつ水分をとらせるのだ。

トレッサは、できたばかりの薬湯を布に染み込ませて男の口内に詰め込んだ。その瞬間、カッと彼の目が見開かれる。

「ぐっ、ぐあっ、ごほっ、ごほっ！」

男はベッドから飛び起きると、慌てた様子で口の中から布を抜き取り、盛大に咳き込んだ。

トレッサは目を丸くしてその様子を見ていたが、我に返ると、急いでキッチンから水を汲んで持ってくる。

「大丈夫ですか。これ、お水です」

男はトレッサが差し出した水を受け取ると、勢いよくがぶがぶと飲んだ。これは足り

ないとトレッサは慌てて追加の水を持ってくる。コップ五杯ほど水を飲んだところで、ようやく男は落ち着いたようで、大きく息を吐いた。

「助かった、すまない。毒を盛られたようだ」

「毒ですか？」

なるほど、だから行き倒れていたのか。

トレッサが納得しかけたところで、男は床に転がった布を忘々しいまいまそうに睨みつける。

「くそっ、口の中がまだ苦い」

「あ、すみません。それ、毒ではなく薬湯です」

「なに、薬湯？」

男の眉間にぐっと皺しわが寄ったのを見て、トレッサは申し訳ない気持ちでうつぶいた。

よかれと思って作ったが、栄養にはかり意識がいつて、味をまったく考慮していなかったことを思い出したのだ。

そういうえば、麓むもとの村人もトレッサの作った飲み薬は絶対に購入してくれない。

塗り薬よりも効果があるのにも思っていたが、理由はこういうことらしい。

「俺を殺そうとしたのではないのか？」

「違います」

いくらトレッサでも、行き倒れていた人間にとどめを刺すようなまねはしない。

せいぜいが、見なかったことにして見捨てる程度だ。

けれどもその案は、男にかけられた見事な呪いによって却下となった。

「私はあなたを助けたんです。倒れていたところを、家に運び入れて介抱しました。それで、栄養が足りていないのかと思ひ、薬湯を」

トレッサがそう口にしたのは、恩を売ってあわよくば彼の呪いを研究させてもらうためだ。

毒を盛って殺しかけたのだと誤解されては困る。

「薬湯？」

「薬湯です。あ、まだありますよ。飲みますか？ 栄養面は保証します」

トレッサはそう言つて、テーブルの上のコップを男に差し出した。

コップから立ち上る湯気を嗅いだ瞬間、彼は顔を青くして首を左右に振る。

「本当に毒ではないのか？」

「違います。飲まないなんでもったいない」

トレッサは毒ではないと証明するために薬湯を飲み干した。

少しくセのある味がして、微かに舌がぴりぴりと痺れる。が、飲めないほどでもない。「本当に葉なのか。良葉は口に苦いとは聞くが」
 「十種類以上の葉草を混ぜた特製品です。あなたを助けようとしたのだと、信じてくれましたか？」

「あ、ああ。毒だと疑ってすまない。ありがとう」
 男はようやくトレッサを信じる気になったらしい。

お礼を言われて、トレッサはほっと息を吐いた。

「ありがとうとおっしゃいましたが、それはつまり、私に恩を感じているということですか？」

「あ？ ああ、そうだな。助けてくれて感謝している」

「ならば報酬を」

すかさずトレッサがそう言うと、男は困ったように眉根を寄せた。

「すまない。礼をしたいのは山々だが、あいにく持ち合わせがない」

「金銭などいりません」

「では、なにを」

「あなたのその顔の——」

「っ！」

トレッサが男の顔について言及した瞬間、彼の顔色が変わった。

顔の傷に手^はを這わせ、慌てた様子で顔半分を隠す。

「なぜだ、包帯は」

「包帯？」

そんなものは元々ついていなかった。トレッサがそう言うと、彼は忌々^{いまいま}しそうに舌打ちをする。

「そうだ。逃げる途中で外れて」

「逃げる？」

逃げるとはどういうことか。トレッサは疑問に思ったが、彼は話したくないのか、固く口を引き結んだ。

「そんなことよりも、あなたのその顔です。顔」

「なんだ。恐ろしい、おぞましいと言いたいのか」

ギロリと睨まれてトレッサは慌てた。そんなことを思うはずがない。

「まさか！ おぞましいなんて、とんでもない。そりゃあ、普通の人は怖がるかもしれませんが、私は専門家です。むしろそんな見事な呪いは初めて見たので、感動した

「くらいです」

「待て、なんのことを言っている？」

「なにして、呪いですよね？」

「呪い？」

トレッサの言葉に男は不思議そうに目を瞬またたかせた。その様子を見て、トレッサはハッと気がつく。

そうだった。普通の人間には呪いが見えたりはしないのだ。

であれば、トレッサの言った「顔」という言葉は全て、彼の顔にある傷を指しているものだと誤解されているはず。

「すみません。私、人と話すのにあまり慣れていなくて。あなたの顔にある傷ではなく、その傷にかかっている呪いについて話がかかったんです」

「呪い？ 傷の話ではないのか？」

「傷はどうでもいいです。私が気になっているのは、その傷の上にかかっている呪いです」

「どうでもいい」

啞然あざむとした男を見て、トレッサはしまったと慌てて手を振った。

なにせ、顔半分が爛ただれるほどの酷い怪我だ。それをどうでもいいというのはよくなかった。

「すみません、どうでもいいというのは言いすぎました。えっと、どうでもいいのではなく、興味が無い——いや、関心がない？」

トレッサが言葉を重ねるにつれ、男はおかしな顔になっていく。

彼の反応を見て自分が失言をしていることに気がついたが、あいにく、引きこもりのトレッサにはそれをフォローする力がなかった。

「あの、えっと、すみません」

「いや、いい。それよりも呪いとはなんだ？」

どう言うべきか悩んでいるところに得意分野の話をふられて、トレッサはピンと背を伸ばした。

「はい。私、こう見えて解呪師かいじゆしでして」

「解呪師？」

問い返されて、トレッサは解呪師という職が一般的ではないことを思い出した。

師匠であったカチャがそう名乗っていたのでトレッサも彼女に倣なまっているが、解呪で金銭を得ているわけではない。解呪師とはあくまで自称なのである。

「呪術の専門家です。でも、人を呪う仕事は受けなくて、解呪だけをおこなう人間のことです」

トレッサはそう言つて、あまり成長しなかった平らな胸を誇らしげに反らした。

トレッサは師匠のカチャを尊敬していた。

だから、カチャに教わつた解呪の技も、素晴らしいものであると誇っているのだ。

「私のこっちの目、少し特別なんです。視力が低い代わりに人の呪いが見える」

「呪いが見える？」

「そう。だから、あなたのその傷の上に、とても濃い呪いがかけられているのも見えています」

「っ!？」

トレッサの言葉に、男は驚いた顔をした。

「この傷に、呪いがかけられているのか？」

「はい。それはもう何重にも丁寧に、ドロドロとしたすごい呪いが」

トレッサは少しばかり興奮していた。

カチャから解呪の手ほどきを受けたとはいえ、彼女は引きこもりである。

この森と麓ふもとの村くらいしか出歩かないので、実際に呪いを見る機会などゼロといっ

てもいい。

カチャのような解呪師になりたいが、こんな場所に引きこもっているのは解呪の依頼などくるはずがない。けれども、街に出るのも嫌だ。

そんな葛藤を抱えていたら、呪いのほうからやってきたのだ。

これはなんとでも解呪させてもらわなければいけないと、トレッサは鼻息を荒くする。

「その呪いとは、どういうものなんだ？」

「そうですね。調べるために少し触ってもいいですか？」

「まさか、この傷に触るのか？」

「傷の上に呪いがあるので。駄目ですか？」

「いや、駄目ではないが……」

男は戸惑いながら許可を出す。彼の気が変わらないうちにと、トレッサは急いで呪いに触れた。

呪いは微弱な魔力のパターンだ。目で見ると、触るほうがその性質がよくわかる。トレッサの指が触れた瞬間、男はビクッと身体を震わせた。

「あ、ごめんなさい。痛みますか？」

「いや、痛みはないが」

男はどことなく居心地が悪そうだったが、痛くないのなら問題ないだろう。

トレッサは容赦なく傷に指を這わせ、指先でたつぷりと呪いを堪能した。

「なるほど、こういう感じですか。あれ、どうかしました？ 顔が赤いですが」

「な、なんでもない。傷を人に触れられるのは初めてなので、驚いただけだ」

「そうですね」

本人がなんでもないというなら、気にすることでもないだろう。

それよりも今は呪いだとしてトレッサは意識を切り替えた。

「それで呪いですが、治癒を阻む効果がありますね。あとは安眠妨害」

「っ！」

心当たりがあつたのか、トレッサの言葉に男は顔を青くした。

「何度もこの顔をどうにかしようとしたが、どんな治療もまるで効果がなかった。魔獣

にやられた傷だから無理なのだと言われていたが」

「呪いのせいですね。治癒系の魔法や薬を遮断して、効果が届かないようにされています」

「まず」

「夜、悪夢ばかり見るのも呪いのせいなのか？」

「おそらく」

トレッサが頷くと、男は深いため息をついた。それから、期待のこもった目でトレッサを見る。

「もしかして、その呪いをどうにかできれば、傷を治せるか？」

「どうでしょうか。見た感じ、かなり古い傷ですよ。皮膚もその状態で固定されています。男の期待を裏切るように申し訳ないが、トレッサは素直な意見を述べた。

治癒魔法はごく一部の人間しか受けることができない、とても高価な治療法だ。

まず、魔法を使うためには魔力が必要だが、魔力を持つ人間が極端に少ない上に、そのほとんどが貴族なのだ。

まれに貴族の血を引かない者でも魔力を得ることがあるが、魔法を使えるようになる者はあまりいない。

トレッサも実は魔力を持っている庶民の部類なのだが、呪いに関することと薬の調査に力を使える程度で、一般的な魔法が使えないわけではない。

魔法を使うには、魔力を持った上で、さらにその魔法の適性を持っていないければならないのだ。

つまり、治癒魔法の使い手は数えるほどしかない。

そんな治療を受けられるのは、お貴族様かよほどの金持ちくらいのものである。

「治癒魔法でなら治せる？」

「治癒魔法なら治せるかもしれませんがね。当てはあるんですか？」

トレッサが尋ねると、男は口を閉じる。

男の身なりはかなりいい。もしかしたら、貴族か裕福な商人なのかもしれない。

であれば、治癒魔法も選択肢として考えられるだろうと、トレッサは勝手に納得した。そもそも、男の傷がどうなるうがトレッサにはさほど興味がないのだ。

「私に解呪させてもらえませんか？」

下心を隠すことなく、トレッサはそう申し出た。

これを逃せば、次はいつ呪いに出会えるかわからない。

トレッサは彼をここにとどめようと必死であった。

「呪いに詳しい人間なんて、探すのは大変ですよ。ちよつとばかり経験は少ないですが、私は専門家です。全力であなたの呪いを解いてみせます」

「その解呪というのは、すぐできるものなのか？」

「すぐは難しいかもしれませんが、ちゃんと研究すれば必ず。ね？ だから私にその呪

いを調べさせてください。ほら、あなたを助けたお礼だと思って」

ここで断られてはたまらないと、トレッサはさらに言葉を重ねた。

「もし急ぎの用があるのなら、その用が終わってからまたここに来てくれるのも大丈夫ですから」

「いや、急ぎの用などない。それに、行く当ても……ない」

その言葉を聞いて、トレッサは目を輝かせた。

「だったら都合じゃないですか。ええ、呪いを研究させてくれるなら、衣食住くらい提供しますとも」

トレッサが前のめりでそう言うと、男は驚いたように身体をのけ反らせた。

「ま、待て。そんなことを簡単に言っているのか？ 見たところ、君はひとり暮らしだろう」

「ひとり暮らしだから大丈夫なんです。他に迷惑をかける人いません」

「そういう問題ではなくてだな」

「私がいいって言っているんです。大丈夫です」

トレッサがぼんと自分の胸を叩くと、男は諦めたようにため息をついた。

「不用心だとは思いますが、正直、助かる。本当に行く当てがないんだ」

どこか憂^{うれ}いを帯びた表情でそう呟く男には、なにやら、ややこしい事情がありそうだ。けれども、トレッサはその事情に首を突っ込もうとは思わなかった。

大事なのは彼が呪われているという一点であり、それ以外の部分はどうでもよかったのだ。

「だが、本当にいいのか？ 俺は……こんな顔だろう。怖くないのか？」
 「顔って怪我のことですよ。怪我がどうして怖いんです？ 感染する病^{やまい}でもないのに」

どう見ても男の怪我は外傷である。うつるようなものではないだろう。

「いや、そうだな。感染はしない」

「だったら問題ありません」

トレッサが力強く頷くと、彼は初めて小さく口元を緩めた。

「それでは、しばらく世話になる」

「はい。ぜひ、呪いを研究させてください。あ、自己紹介がまだでしたね。私はトレッサといいます。この森で呪いの研究をしながら、薬を作って暮らしています」

「俺は……レニーと呼んでくれ」

男は名乗るときに、ほんの少し躊躇^{ためら}いを見せた。

その様子を見て、もしかしたら偽名かもしれないとトレッサは疑ったが、それもどうでもいいことであった。偽名だろうがなんだろうが、呼びかける名前があれば困りはしない。

「わかりました。それではしばらくよろしく、レニー」

「ああ。よろしく頼む」

こうして、レニーがトレッサの研究対象となることが決まったのだった。

森での生活

その日から、トレッサとレニーの共同生活が始まった。当然かもしれないが、レニーには森暮らしの経験がないらしい。トレッサにとっては当たり前の日常も、レニーにとってはそうでないことが多々あった。

レニーは貴重な呪われた人なのだから、家でのんびりしていいと思っていたのだが、トレッサの予想以上にレニーはよく働いた。

「なぜこの部屋は、こんなに散らかっている」

「ぐっ、この薬草、カビているのではないか？」

「なんだこのシーツは、虫に食われているぞ!？」

基本的に呪い以外には興味がなく、家事などは最低限、健康を維持できればいいと思っていないトレッサの感性は、レニーには受け入れがたいものだったようだ。

レニーは荷物で埋もれた部屋から箒を発掘して家を掃除し、腐った薬草の処理をおこない、寝具や衣服の虫干しを始めた。

当初、レニーをどこかの裕福なおぼっちゃんだと考えていたトレッサは、そのテキパキとした働きぶりに驚いた。

レニーは家事に慣れているようには見えなかったが、それでもトレッサの何倍も上手い。

日ごとに綺麗になっていく家を眺めて、トレッサは実にいい拾いものをしたと喜んだ。たとえ呪われていなくても、レニーは素晴らしい男だ。

特にトレッサが感動したのは、レニーが作った料理であった。

初日の夜はトレッサが手料理をふるまったのだが、腕によりをかけた品はレニーの口に合わなかったらしく、彼は一口で匙を置いたのだ。

「人間の食べものと思えない」

「そうですか？ 慣れればいけますよ」

険しい顔で手料理を眺みつけるレニーの隣でトレッサが完食すると、彼は化け物でも見るような目をトレッサに向けた。

確かに味がいいとは言えないが、慣れればどうともなるものだ。

トレッサがそう言うと、レニーは明日からは自分が作ると申し出た。

そうして翌日に出されたレニーの料理は、素晴らしいものであった。

トレッサが作った料理と本当に同じ材料でできているのか疑いたくなるくらい、美味しかったのだ。

息を止めずに食物を呑み込めるなんていつぶりだろうと、トレッサは感動した。

「すごい。すごいです、レニー。ちゃんとお肉の味がします！」

「俺は君がすごいと思う。いつたい、今までどうやって暮らしていたんだ」

不思議そうに問いかけられて、トレッサは首をかしげた。

どうやってと言われても、ある程度の栄養をとり、眠りさえすれば人間は生きていけるものだ。

とにかく生でなければお腹を壊す確率は減るので、火だけは通すようにすればいい。

そう答えると、レニーは額に手を当てて深くため息をついた。

「もつと手をかけて調理すれば、美味しく食べられるだろう」

「その手をかけるのが面倒です。どうせ、お腹に入れば同じなんですから、そんな時間があったら、本を読むか研究をしたいじゃないですか」

トレッサは別に味音痴というわけではない。レニーの作った食事は素直に美味しいと思えるし、自分の料理とどちらを食べたいかと聞かれれば、迷わずレニーの食事を選ぶ。

けれども調理にかかる手間を考えると、いつもの食事でもいいとなってしまうのだ。

もちろん、美味しいものを食べられるのは大歓迎なので、トレッサは本当にレニーに感謝をしていた。自分がなにもしなくても、家が片付き、美味しい食事が出てくるのだ。このままずっと、レニーがこの家に住んでくれればいいのにとさえ思うほどだった。

昼間の生活は問題なかったが、夜になると大変であった。

レニーは、トレッサの師匠であるカチャが以前使っていた部屋で生活をしているのだが、深夜になると、その部屋から唸り声が聞こえてくるのだ。その声があまりに大きく、また悲鳴じみていたので、驚いたトレッサは慌てて彼の部屋へと向かった。

勝手に部屋に入るのは失礼かと思ったが、緊急事態と判断してドアを開ける。

トレッサが声をかけると、レニーは脂汗あせらめせを流しながらベッドから飛び起きた。

「すごい声でしたけど、大丈夫でしたか？」

「すまない。起こしてしまったか」

レニーは申し訳なさそうにトレッサに謝罪した。聞けば、いつものことだという。寝れば悪夢にうなされて、途切れ途切れにしか睡眠をとることができないらしい。おそらくは、呪いかけられた安眠妨害のせいだろう。

どうすればいいか考えた結果、トレッサはレニーのために特製の眠り薬を調合した。

これを飲めば、朝まで夢も見ずに眠れること間違いなしの効能のものだ。レニーはなぜかこの世の終わりのような顔をしてその薬を飲み干した。狙いどおり朝まで安眠できたようなので、これで問題はないだろう。

「おはようございます、レニー。ちゃんと眠れたみたいですね」

「ああ、そうだな。こんなに寝たのは久しぶりだ」
「それはよかった。じゃあ、毎晩薬を調合しますね」

親切心からトレッサが言うと、レニーはうつと言葉を詰まらせた。

「なあ、トレッサ。あの薬、もう少し味をどうにかできないのか？」

「え、味ですか。できなくはないかもしれませんが、効果が落ちますよ？」

味を改善しようと思えば、手間がかかる上に効能も下がる。だったら、苦いのを我慢して飲むほうがいいのではないか。

トレッサはそう思うのだが、レニーは首を大きく左右に振った。

どうやらレニーにとつては効果よりも味のほうが大事らしい。

仕方がないので、トレッサはその日、薬の改善に努めることにした。

レニーが日常の細々したことを片付けてくれるおかげで、トレッサの研究時間が増

えた。

それならばとトレッサは日々、レニーの呪いの研究に打ち込んでいる。

呪いに関する研究資料は少なく、トレッサは残された師匠の手記をもとに解呪薬を作らなければならなかった。

魔法の存在は広く知られているが、呪いはそうではない。

罰^{ばら}当たりな行動をすれば呪われるぞと脅しに使ったり、あるいは魔獣が人を呪うという迷信めいたものはあるが、実際に呪いが存在すると確信を持っている人間は、この国にはほとんどいないのだ。

ゆえに、呪いの研究もおこなわれていない。

では、魔法と呪いはどう違うのか。

魔法とは、魔力を使って自然原理を捻^ねじ曲げることをいう。

たとえば治癒魔法であれば、魔力を使って人体に直接影響を与える。

また、火・水・風・土のいわゆる四大魔法は精霊に魔力を与えることで、それらの要素を自由に操る力を得ているらしい。

一方、呪いとはなんなのか。

師匠のカチャは、呪いも魔法の一種だとトレッサに教えてくれた。

誰かに恒常的に不具合を与える魔法が呪いの正体なのだとトレッサは認識している。別の国では、呪いではなく状態異常魔法なんていう呼ばれ方をしているらしい。ここリルヴェル国では呪いは魔法と認められておらず、ろくに研究もされていない。それどころか、呪いが本当に実在するのかさえ疑われている。

そんな中、カチャはずっと呪いの研究を続けていた。

「呪いは存在するよ。現に私ができる。この世界に呪いが存在する以上、それによって困る人だって絶対にいるはずなんだ。だから、誰になにを言われようと、私は彼らを救う研究を続ける」

カチャの言葉を思い出しつつ、トレッサはノートにペンを走らせた。

呪いを解くにも、多少の魔力が必要となる。

トレッサは呪いに直接触れて解呪することはできないが、魔法薬を作り、それを介して解呪をおこなう方法を、カチャから教わっていた。

魔力の混ざった薬は魔法薬と呼ばれ、通常の薬よりもずば抜けて効能が高くなる。

魔力によって素材本来の力を増幅させたり、あるいは違う方向に捻じ曲げたりできるからだ。

解呪に使うものだけでなく、トレッサは様々な魔法薬の製法を学んでいた。

だが、トレッサの知識はカチャには遠く及ばない。経験もない。

ただ、カチャの志を継ぐのだという意気込みだけはあった。わからないのならば、試して、調べて、知っていけばいいのだ。

その日、トレッサは研究室で新薬を調合していた。新しくできたばかりの薬を瓶に詰めると、うーんとひとつ伸びをする。それから、研究室の扉に向かって大きな声を出した。

「レニー、ちょっと来てくれますか?」

トレッサが呼びかけると、レニーがやってきた。

小さな家なので、別の部屋にいても簡単に声が届くのだ。

「この薬を……なんですかその顔。大丈夫です。飲み薬じゃありません。いつもの解呪用の塗り薬ですよ」

「ああ、あれか」

薬を取り出した瞬間レニーの顔が曇ったが、解呪に使う塗り薬だと聞いて表情が和らいだ。

解呪以外にも睡眠薬や栄養剤を飲ませていたため、レニーはすっかり薬嫌いになって

しまった。

「ちょっと不味いからって薬を嫌がるなんて、レニーは子供ですか」

「トレッサの作るものは、ちょっと不味いの範疇を超えている。舌が痺れて毒かと思う薬なんて、どう考えても普通の薬じゃあない」

「そうですね？ 師匠は黙って飲んでくれたんですけれど」

「言いながらトレッサは薬瓶の蓋を開ける。とたん、濃厚な薬草の匂いが鼻をついた。

トレッサは指で薬をすくってレニーを見上げる。

「薬を塗るので、前髪をよけてください」

「あ、ああ」

よほど傷がコンプレックスなのか、爛れた肌を見せるときレニーはいつも微かに手が震える。

そのたびにトレッサは申し訳なさを感じるが、呪いはその傷の上にかかっているのだから必要な作業だ。

左目で呪いの範囲を見ながら、それに沿って薬を塗っていく。

トレッサの指が触れるたび、レニーは居心地が悪そうにぴくりと身体を動かした。

「どうだ？」

「うーん。今回のも駄目ですね。理論上は効果が出るはずなんですけど、呪いがあまりにも傷に強くこびりついていて、薬が入り込む余地がない感じです」

トレッサは近くに置いた布を水で濡らし、効果が出なかった薬を拭き取った。

「すみません。すぐに結果を出せなくて」

「いや、かまわない。むしろ、俺のほうが申し訳ない。長々と居候してしまって」

「とんでもない。いつまでもいてほしいくらいです」

トレッサは心の底からそう言った。

レニーが来てからというもの、薬草の棚が整理されて研究の効率が上がったのだ。

整理整頓が苦手なトレッサだったが、ものを片付ける大事さを実感した。

「いつまでもいてほしいか。そんなことを言われたのは初めてだ」

「信じられません。レニーはとても優秀じゃないですか」

手早く家事をこなす今の姿からは想像できないが、レニーははじめ、家事のやり方を知らなかったのだ。ところが、虫干しのやり方も、掃除も、トレッサが軽く説明したただけであつたという間にマスターしてしまい、今では効率のいい方法を自分で考えておこなっている。

かった。

なにをやらせてもとにかく覚えが いい のだ。
頭のいい人間とは、レニーのような男をいうのだろう。

今は家事をやらせているが、別の仕事をしてても結果を出してくるに違いない。
トレッサがそう言うのと、レニーは諦めたような顔で首を横に振った。

「なまじ能力があるぶん邪魔に思われることもある。それに俺は、こんな顔だ」

レニーは爛れた皮膚を撫でて自嘲した。

そこまで気にするほどのことだろうかと思うのは、トレッサが当人ではないからだろう。

おそらくレニーは傷がらみで嫌な目にあってきたのだ。

その積み重ねが、根深いコンプレックスになっている。

「治りますよ」

レニーを励ますようにトレッサは言った。

「呪い、絶対に解いてみせますから。そうしたら、傷を治しましょう」

レニーはじっとトレッサを見つめると、ふっと表情を和ませる。

ここに来たばかりの頃は警戒していたのか表情も硬かったが、最近はこのように柔ら

かい顔を見せてくれるようになった。

「ああ、よろしく頼む。……ありがとう」

感謝の言葉が紡がれて、トレッサの心が浮き立つ。

呪いの研究ができればそれでよかったはずなのに、最近はどうしてレニーの力になれ
ることが嬉しいと思うようになっていた。

その日からトレッサはますます研究に力を入れた。

森に薬草を採りに行き、そうでないときは一日中調合をおこなう。

薬に混ぜる魔力の配分を変えてみたり、素材を変えてみたり。とにかく試せることは
なんでも試したが、なかなか成果が出ない。

ちなみに、トレッサの研究室はレニーが来る前と比べると、同じ部屋とは思えないほ
ど整理されている。

床に無造作に積み上げられていた木箱は、レニーの手によって整頓され、ラベルまで
ついた状態で綺麗に棚に並んでいた。

その中のひとつ、レグリル草の箱に手を伸ばしたトレッサは、中身が空になっている
ことに気がついた。レグリル草は魔力を薬に馴染ませる役目を持つ薬草なのだ。使用頻

度が高いため、すぐに在庫が切れてしまう。

仕方がない、森に採りに行くかとトレッサは重い腰をあげた。

ずっと作業台の前に座っていたから、筋肉が凝り固まってぎこちない音を立てる。

うーんと大きく伸びをしてから、トレッサは研究室を出て籠と二本のナイフを手にとった。

一本は採取用、もう一本は護身用だ。

トレッサが出かけようと思ったところで、二階からレニーが下りてきた。掃除の途中だったのか、手には雑巾を持っている。

採取準備を終えたトレッサを見て、彼は目を丸くした。

「採取に向かうのか？」

「はい。レグリル草が切れてしまつて。ついでに他の薬草も採つてこようかと」

「わかつた。少し待て、俺も一緒に行く」

トレッサがなにかを言う前に、レニーは手に持っていた掃除用具をてきぱきと片付けて、手早く準備を始めた。

予備のナイフを腰につけると、さあ行くかと彼女の隣に並ぶ。

「家で待っていてもいいですよ？」

「森の中には獣がいるだろう。もしかしたら魔獣も出るかもしれない」

レニーは絶対に自分もついていくと言わんばかりに、ふんと鼻を鳴らした。

「心配しなくても大丈夫ですよ。何年ここで暮らしていると思つていますか。魔獣なんてまず出ませんし、普通の獣なら自分で対処できます」

「だとしても心配だ。守らせてくれ」

さらりとすごい台詞を言われて、トレッサの顔が熱を帯びる。

誰かに心配されるのなんて何年ぶりだろうか。

胸の中にこそばゆい気持ち芽生えて、トレッサは慌てて手に持った籠を握り直した。「ついてくるなら、レニーも籠を持ってください。持ち帰る薬草は多いほうがいいですから」

突き放すような口調になってしまい、トレッサは慌ててレニーの顔色を窺った。

気分を害したのではないかと不安だったが、気にした様子はない。トレッサが付き添いの許可を出したことに満足したようで、言われるがままにいそいそと籠を用意していた。

ほっと小さく息をはいて、トレッサはギシギシと軋む木戸を押し開けた。

トレッサにとつて、このクレバの森は庭のようなものだ。どこにどんな薬草が生えているか、どこを歩けば近道なのか、完全に覚えている。

「確かな足取りで森を歩くトレッサを見て、レニーは感心したようだ。
「似たような景色なのに、よく道がわかるな」

「そりゃあまあ。赤子のときからこの森に住んでいますから」

「赤子のときから？」

大きく膨らんだ木の根元を避けながら、レニーは不思議そうな声をあげた。

クレバの森はとてもじゃないが、子育てに向いた場所ではない。

野生動物がウロウロしているし、麓ふもとの村に行くにもかなりの距離を歩かなければならないのだ。

「私、捨て子なんです。両親がいなくて。それを、師匠が拾って育ててくれたんですよ」

「師匠というのは、俺が使っている部屋の、前の主だよな？」

「はい。元々、呪いの研究をしていたのは師匠なんです。クレバの森は色んな薬草が生えているから、研究にうってつけだ。私を育てながら研究を続けるのは大変だったでしょうに、師匠は私に色んなことを教えてくれました」

薬草の見分け方に、葉の作り方。それに、呪いについて。

カチャはトレッサの師であり、たったひとりの大切な家族でもあったのだ。

「ちょっと変わっていましたが、優しい人でしたよ」

「その師匠は、今は？」

「五年前に亡くなりました」

トレッサの言葉に、レニーは表情を曇らせた。

「すまない。悪いことを聞いた」

「いえ。気にしないでください」

当時のことを思い出すと、トレッサの胸は石でも詰められたかのように重くなる。

五年という月日が流れた今も、カチャの死をトレッサは上手く呑み込めないでいた。本当はこの森にいるよりも、人里に下りたほうがずっと暮らしやすい。

けれどそうしないのは、ここがカチャとの思い出の地だからだ。

この森を出る決心を、トレッサはずっとつけられないでいる。

「レニーはどうしてこの森で倒れていたんですか？」

話の流れを変えるように、トレッサは気になっていた疑問をぶつけた。

レニーがわけありなのはトレッサも薄々気がついてはいたが、今までは、そのわけを聞

き出そうとは思わなかった。無理に聞くものでもないし、レニーの過去にそこまで関心
がなかったからだ。

けれども、生活を共にして、トレッサはもう少しレニーのことが知りたくなった。

トレッサの問いかけに、レニーは困った顔をした。

逡巡するように、口を開きかけては閉じることを繰り返す。

トレッサは辛抱強くレニーの言葉を待った。

「言えば、トレッサは俺を追い出すかもしれない」

「そんな酷い事情なんですか？」

「……」

「いきなり追い出したりしませんよ。レニーが私になにかするなら別ですが」

レニーがそんなことをしないというのは、この数日でよく理解していた。

だから、レニーがどんな事情をうちあげようとも、トレッサは彼に出ていけと言うつ
もりはない。

「罪人だったんだ。だが、護送される途中で逃げてきた」

「なにか罪を犯したんですか？」

「殺人罪だ」

「レニーが誰かを殺した？」

トレッサは驚いて目を瞬かせる。

「冤罪だ。俺がやったわけではない」

悔しそうにギリツと奥歯を噛みしめるレニーを見て、トレッサに同情心が芽生える。

「嵌められたんだ。俺ではないと何度も訴えた。だが、信じてはもらえなかった」

「それは、辛かったですね」

トレッサの言葉に、レニーは不思議そうな顔になる。

「トレッサは俺の言葉を信じるのか？」

「信じますよ」

トレッサはまだ、レニーの人となりを全て理解したわけではない。

けれども、やったことをやっていないと嘘をつく人間だとは思えなかった。

それに、トレッサにはレニーを信じたい大きな理由があった。

「私の師匠も冤罪で殺されたんです。だから、レニーの言葉を信じます」

「トレッサの師匠も？」

「はい。殺人未遂の罪でした。師匠がそんなことをするはずないんです。だけど……」

カチャは無実だと、トレッサは必死に訴えた。

けれども、トレッサの言葉をまともに聞き入れる者などいなかった。司法というのは、正しい者の味方ではない。力の強い者の味方なのだ。罪を犯していない人間が、誰かの都合で殺されることが容易にあるのだとトレッサは知っていた。

「レニーを信じますよ。追いついたりしません。誓ってもいいですよ」

「だが、俺がいることで、トレッサに迷惑がかかるかもしれない」

「そのときはそのときです。ですが、ここを見つけるのは大変だと思えますよ」

行く当てがないと言っていたのに、呪いが解けたら出ていくという素振りを見せていたのは、トレッサに迷惑をかけないためだったのだろう。

その必要はないと、トレッサは改めてレニーに告げた。

「行く当てがないなら、好きだけここにいていいですよ。呪いが解けたあとでも」

トレッサの言葉にレニーは迷ったような顔をしたものの、小さくありがとうと呟いた。

濃い緑の匂いを嗅ぎながら、籠かごがいっぱいになるまで葉草を摘む。

ふたりで作業したら、いつもより早く採取が終わった。

服についた細かい葉っぱを払ったとき、トレッサの指先に小さな痛みが走る。

「痛っ」

「どうした？」

「あー、コムリの葉でちょっと切ったみたいです」

地面に生えた細長い葉を摘まむ。コムリは葉の端がギザギザとしていて硬く、素手で触るとよく皮膚を切るのだ。

「平気か？」

「大したことないですよ」

「見せてみる」

レニーは籠かごを地面に置くと、慌てた様子でトレッサの手を取った。

急に触れられて、トレッサの心臓が少し跳ねる。

傷は大したことはない。少しばかり血がにじんでいるが、数日で治る程度だ。

「血が出ている」

ほんのかすり傷だというのに、レニーは痛ましそうに眉根を寄せた。

「このくらい、なんてことはありませんよ」

「少し、待っている」

レニーはそう言うのと、トレッサの傷口にそつこのひらと掌をかざす。

なにをするつもりかとトレッサが首をかしげていると、温かいなにかがレニーの掌てのひらから流れ込んできた。トレッサの指先が熱を帯び、驚いているうちに、みるみる傷が塞がっていく。

完全に傷が消えた指を見て、トレッサは目を丸くする。

「今の、まさか治癒魔法？ レニー、魔力持ちだったんですか？」

トレッサが驚くと、レニーは申し訳なさそうに頷いた。

「黙っていてすまない」

「驚きました。なるほど、それで治癒魔法の当てがあるような感じだったんですね」

どうするつもりかと思っていたが、まさか、本人が治癒魔法の使い手だったとは。

トレッサは治った指を太陽の光にかざしながら、感嘆の息をついた。

「治してくれてありがとうございます」

「それだけか？」

「それだけとは？ あ、まさか金銭ですか？ 勝手に治してそれは酷いですよ」

治癒魔法の使い手は希少で、治療を受けるには高額な費用が必要のはずだ。

トレッサが思わずレニーを睨むと、彼は慌てて首を振った。

「そうじゃない。なぜ魔法が使えるのかと、事情は聞かないのか？」

「あー、そっちですか。気になりますけど、隠していたことを聞き出すのもなあ」と

彼は治癒魔法の当てがある素振りだったが、自分が治癒魔法を使えるとは言わなかった。

であれば、そのことについて深く聞いていいものか。

「それに、なんとなく察しはついています。護送中にしてはかなりいい服を着ていましたから。レニーって、元々は貴族なんじゃないですか？」

裕福な庶民かとも思ったが、魔法が使えるのであれば十中八九、貴族だろう。

どこかの貴族の息子が冤罪えんざいをかけられて護送された。クレバの森を通るということは、向かう先はこの国の西端にある孤島だったのかもしれない。あの島はよく、罪人の流刑に使われると聞く。

「そのとおりで。色々と秘密にしていますまない」

「仕方ないですよ。よく知らない相手にベラベラと喋れませんよね。罪人で、貴族で、治癒魔法の使い手なんて、いくらでも利用価値がありそうですし」

国に突き出されたくなければ言うことを聞けと脅されて、魔法を使わされるだとか。そうでなくても、治癒魔法の使い手がいるなんて噂が立てば、すぐに居場所がバレてしまう。

逃亡中の身であれば秘密にするのが当然だろう、とトレッサはレニーの謝罪を受け入れた。

「なぜニヤニヤと笑う」

「え、ニヤニヤしていました?」

「ああ。している」

「ちょっと嬉しいなって思ってた。話してくれたことは、少しは信用できると思ってたことですよね?」

バレれば、身の危険に晒さらされかねない秘密だ。

おそらくレニーは、全てを黙ったまま治療を終えてここを出ていくつもりだったのだろう。

それなのに、トレッサに秘密を教えてくれた。トレッサを信じてくれたのだ。

「そんなことが嬉しいのか?」

「嬉しいですよ。レニーと仲良くなれている感じがするじゃないですか」

トレッサが言うと、レニーは目を瞬またかせた。

「トレッサは、俺と仲良くしたいと思ってくれているのか?」

なぜか真剣な口調でレニーが問いかける。

「そうですね。信用してもらえたら嬉しいですし、仲良くなりたいです」

トレッサの言葉に、レニーは相手を崩した。

「そうか。君は俺の呪いにしか興味がないのかと思っていた」

「きつかけはそうだったんですけど。でも、レニーのことは好きですよ」

トレッサが笑うと、レニーの身体が固まった。

そして、酷く驚いた表情で、じっとトレッサを見つめてくる。

「好き?」

「はい。レニーはすごいですよ。なにもしなくてもいいって言っているのに、いつも家事をしてくれて。本当に感謝しているんです。ありがとうございます」

トレッサが改めてお礼を言うと、レニーはなぜか残念そうに肩を落とした。

「ああ、なるほど。そういうことなら俺もトレッサに感謝している。俺を受け入れてくれて、呪いを解こうと努力してくれてありがとう」

レニーにお礼を言われ、トレッサはなんだか身体が軽くなったような気持ちで、葉草の詰まった籠かごを握り直した。

「戻りましょう。葉草も、これだけあれば十分です」

「ああ、そうだな。戻ろう」

柔らかに笑うレニーの顔を見ると、トレッサの胸が温かくなる。木々の間からキラキラと差し込む木漏れ日を眺めながら、この時間がもう少し長く続けばいいのにとトレッサは思った。

呪いの研究は順調とはいえなかったが、少しばかり進展があった。レニーの魔力を混ぜると薬の効果があがったのだ。

長期間かかっていた呪いは、かなりの強度でレニーにへばりついている。けれども薬にレニーの魔力を混ぜることで、レニーの一部だと誤認させて、呪いを吸着させることができた。

とはいえ、長年魔力を薬に混ぜる練習を続けてきたトレッサと違って、レニーが薬に魔力を混ぜるのは難しいようだ。何度やってもちよいどいい具合には混ざらず、狙ったとおりの効果が出ない。

薬に魔力を混ぜるには、とても繊細な魔力のコントロールが必要になる。

たとえば、オニグリ草に四の魔力を注ぐと増幅の効果になるが、五の魔力を注いでしまつと効果は消滅する。魔法薬作りはそのくらい繊細なのだ。その微妙なコントロールを習得するにはどうしても修練が必要となり、一朝一夕で覚えることはできない。

そのため、トレッサはレニーの魔力が溶けた物質から、魔力を取り出す方法を考えた。その代表が血液である。魔力を持っている人間の体液には、一定の濃さの魔力が溶けているのだ。

レニーの血液を使って魔力を移してみたが、魔力が濃すぎて上手くいかない。

血液に溶けている魔力の濃さが六だとすると、そのうちの四だけを取り出すということができないのだ。四の魔力が必要ならば、四の濃度で魔力が溶けこんでいる物質を探さなければならぬ。

唾液や涙でも試してみたが、今度は弱すぎて駄目だった。

「うーん。難しいですね」

「血も唾液や涙も駄目。爪も駄目だったな」

「あともう一步って感じなんですけど。レニーの魔力が溶けているもの、他にないですかね」

トレッサはうんうんと唸りながら、なにか手掛かりはないかと書物に目を通していく。何冊も本や手記を読み漁り、ふと気になる内容を発見した。

「あ」

「なにか見つかったのか？」

「あー、いえ、そうですね。手掛かりはあったんですが」
 トレッサが読んでいたのは、人体のどこに魔力が溜まりやすいかを研究した書物だった。

本によると、すでに試した血や涙、唾液以外にも、魔力を溜めやすいものがあるらしい。

口に出すのが憚られる内容だったため、トレッサは言葉を濁し、書物をレニーに差し出した。

「ここ、読んでください」

「ん？ これは」

レニーは書物に目を通して、少し顔を赤くした。

無理もない。本には性的分泌液、つまり、精液や愛液といった体液に魔力が溜まりやすいと記載されていたのだ。

「これで上手くいく可能性もあるんですが……試してみます？」

「試すって、これとか？ どうやって」

「えっと、レニーが出した液体を、瓶に詰めていただければいいんですが」

トレッサが気まずい思いで提案すると、レニーは難しい顔をした。

そして、ぎゅつと眉根を寄せてから、ゆっくり首を左右に振る。

「無理だ」

「やっぱり、駄目でしょうか。ものがものですよ」

「あ、いや。渡すのが嫌というわけではないんだが、別の問題がある」

「別の問題？」

問い返すと、レニーは宙を眺めてから、気まずげに口を開く。

「なんとというか、非常に言いづらいのだが……アレが起たないのだ」

「アレが起たない」

トレッサはレニーの言葉の意味をすぐには理解できず、思わずオウム返しにしてしまった。

女性であったカチャと長く引きこもり生活をしていたトレッサは、異性の身体に対する知識が少ない。どうにか書物で知った知識を引っ張り出し、意味を理解しようと努めた。

「つまり、性的興奮をしても、男性器が起立しないということでしょうか？」

「う、まあ。そういうことだ」

「それは、治療魔法では治らないのですか？」